**個別支援計画とケース記録　第3回「アセスメントとは」01160803wtj**

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| ページ＃ | シートタイトル | 小見出し | 要点　「」はテロップ |
| P1下 | アセスメントとは何か | 1. 利用者の想い（希望や夢）を確認し | 「利用者の想い（希望や夢）を確認すること」が一番大事。 どうしても私たちは、できることできないことに目が行きがちだが、「利用者のニーズや想いに応えていく」。 「利用者の自己決定や自己選択、エンパワメントを育てていく」ことが大事。 |
| 1. 利用者を取り巻く環境・状況を考慮し | 環境と利用者個人との関係性の中で、私たちは利用者の支援を考える。 「利用者を取り巻く環境・状況を精査する」ことがとても大事になる。 |
| 1. 利用者の潜在能力、可能性といった長所・強さを大切にしながら | 「強みを活かす、得意なことを活かす」。これにもコツがいる。(後述) |
| 1. 利用者の生活課題や困難を把握し、分析・検討すること | 生きづらさや生活のしづらさを分析する。「利用者直接本人から事情を聴く」。 |
| 1. 支援計画を立て、⑥実際的な支援を展開してくための課題分析 | 課題を段階的に積み上げていく。「課題を分解して、スモールステップ、スモールゴールをつくる」。 |
| 1. アセスメントは一度で終了せず、支援を実践しながら | アセスメントは支援計画を作る当初、前段階だけではなく、支援過程を通じて、「循環的に繰り返しアセスメントする」 |
| 1. 記録し、それに基づいて⑨モニタリング | アセスメントに基づき、「実践をし、記録をし、それを評価として中間にまとめていく」ことが、モニタリングになる。 |
| 1. 再アセスメントして、支援計画を軌道修正する | モニタリング後に再アセスメントをして、支援計画をもう一度全体的に見直して、軌道修正する。 |
| 1. 循環的プロセス | 上記のプロセス・循環が非常に大事。アセスメントはそのかなめとなる。 |
|  | 「個別支援計画、記録、アセスメントは三位一体の関係」 |
| P2上 | 基本的なアセスメント内容 | ・生育歴、家族歴、利用者（必要に応じて家族）の意向 | 特に「利用者の意向」は大事。 時には、利用者と家族の意向がぶつかる場合もあるが、それも含めて記録する。 |
| ・参加・活動、訓練や就労状況、本人を取り巻く環境など | 特に、参加と活動では、「どのように一般社会の中に参加していくのか。どのような活動に参加していくのか」という視点で利用者をとらえていく。  「制約を外していくこと、制限を解除していくこと」がアセスメントで大事。 訓練や就労状況、本人を取り巻く環境では、人、物的な環境、ソフト、例えば「日常的な事業所のプログラム、支援の関わり方、設備のあり方」も見直してくことが必要。 |
| ・本人の強み・環境の強み ・利用できる社会資源や関係機関 | 本人の強み、環境の強みを考え、利用できる資源を作っていく、あるいは見直していくことが大事。 |
| 課題分析と優先順位 | 総合的な分析を行いながら、徐々に意向をくみ取りながら課題分析をして、優先順位を決めていく。 |
| ・利用者の初期状態や基本的ニーズの把握から、課題を整理 | 利用者の初期状態や基本ニーズを把握していく中で、徐々に利用者が何を求めて、そこのニーズは何かが見えてくる。その中から一番大事な課題を整理していくことになる。 |
| ・課題の整理に当たっては、全体の課題と各分野別の課題を整理する | 「多機能、多職種連携の中で吟味されること」であり、「全部支援者が一人で抱え込むのではなく、チーム全体で課題を分担すること」。 |
| ・課題の整理にあたっては、優先順位を設定 | 課題の整理にあたっては、何から取り組むのか、とりあえず何からやるのか、「長期目標、短期目標、そして当座何をやるのかという緊急の目標」、目標や課題をきちんと分けて考えることも大切。 |
| P2下 | ■ニーズとは |  | 利用者のニーズというと、利用者の夢や希望を考えがちだが、アセスメントで考えるニーズとは、「環境要因、個人の要因、二つの要因ではなくいかない葛藤状態にあるものがニーズ」。 |
| P3上 | ■ニーズって何だろう？ |  | つまり「利用者の夢そのものではなく、あるべき姿、より望ましい状態、より望ましい状態をあるべき姿に近づけるために必要な一部欠けているもの、その現実の内容の課題を実現するための諸手段を考えていくこと」がニーズの考え方。  私たちは大きな抽象的な望ましい状況を夢に描くが、実際の課題では、「具体的な現実的な内容で考えていく」必要があり、「優先的な内容が何かを具体的に選んでいく」必要がある。  「あるべき姿をより望ましい状態に落とし込み、より望ましい状態の不足している部分を見つけ、それをさらに分解して考えていく」ことが大事。 |
| P3下 | ICFを活用した利用者把握 | 活動制限、参加制約 | 「活動の制限と参加の制約が特長的」。 今までは、機能・構造障害、健康状態といった、できていない所や疾病の状況などの制限の中で自立をしていくという考え方が強かった。しかし、個人要因と環境要因から疾病や機能的な条件がぶつかり合った状態の中で、「利用者一人ひとりが社会の中で活動を制限されていること、活動を制限されていることを具体的に出していくこと」が大事。 ICFの考え方を取り入れ、「私たちが利用者の社会生活の中で生活のしづらさや制限、矮小化（わいしょうか）されている、あるいは、できるにもかかわらず、できていないことを課題にしていく」。あるいは、もっと「人生の大きな流れの中で社会参加や役割分担を考えていくこと」が大事。  就労支援など、特にB型で言えば、目の前にある種目をこなしていくだけではなく、人生の中で社会参加をしていく、「より仕事ができるための能力、意欲、動機付けをしていく支援の目標」が非常に大切になってくる。 |
| P4上 | アセスメントのまとめ | ・問題主義はNG | 「課題主義で考えていく。できないことも丸ごとひっくるめて支援していく」。 |
| ・状況や関係性を重視 | 「環境要因を考えていくこと」が大切。なぜならば、「支援者側の支援の質に直接に結びついている」からである。 |
| P4上 | アセスメントのまとめ | ・ストレングス重視 | 弱い所に目を向けるのではなく、本人の強み、環境も含めて、「本人のもっているものをうまく引き出して育てていくこと」がとても大事。  アセスメントは利用者の全体状況の中からそうしたものを見つけることを重視しているプロセス。 |
|  | 「個別支援計画、記録、アセスメントは三位一体で動いているもの」 |